

WAYプロジェクト第5回

2020年10月16日(木)

今日は、いつものように遠方より土屋先生、インクルーシブ教育研究所から最近大正中学校にお力添えを頂いている堀智晴先生、秋津小の岡田先生、葛小中の松田先生、本校の新子先生、高砂先生、村田先生、堀榮先生、松浦先生、鶴田で行いました。前半は堀榮先生の疑問から議論が始まりました。午前中に堀榮先生が鶴田に「大中祭のときにいろいろジレンマがあった子もいたと思うんです。これってジレンマストーリーで書けますかね?」「んー、みんなに当てはまることじゃないと思うねんけど、それっていけるのかな?」という2人の疑問から、その話を土屋先生に聞いて頂きました。

まず土屋先生から言って頂いたのは、リアルストーリーは扱うのが難しいこと。そのストーリーを扱うことで子どもたちが傷ついてしまったり、やる気がなくなるようでは意味がないもので、ストーリーを共に考えることで、勇気をもたらえたり、考えが広がったりと、前向きになれるようなストーリーを考えなければいけないと言うことを仰って頂きました。

制服ネタは考えれば考えるほどおもしろい、そもそも学校にある校則もそうだよな、と土屋先生。そもそもなぜ、大中祭のときは制服をきちっと着ないといけなかったら。堀先生からは、大正中学校の歴史を鑑みれば、なぜ体育館に入るときは制服を着る、というルールを固めてしまっただけで抑圧しているのか不思議だね、という話もありました。ああ、確かに。そう言われればそうだった、と気づかせられる瞬間でした。既存のルールや、世間や学校の当たり前を疑うこと、問い直しをすることが道徳で培う力の一つではないか、という話でした。

後半は鶴田のジレンマストーリー「自分で人生を決めるとは」というテーマで、中学校3年生の進路選択時のジレンマのストーリーを提示させて頂きました。自分がどうしてもしたいということで進路を決めるべきか、親の言うことを聞く進路を選ぶか、というジレンマで、「家族愛」と「自主自律」の2項対立をする形でストーリーを書きました。そもそもテーマにある「人生」とは、中学校の時代に選択できるものなのか、それよりも進路選択という言葉の方が適切ではないか、という意見も頂戴しました。親との関係が悪い子がいたとしたら、一方で親の言うことをものすごく理解できて、100%言いつけを守ることができる子がいたときにどうする?土屋先生からは、このジレンマを通して、子どもたちにどのような力をつけたいのか、どのように選択肢が広がったり、可能性が広がったりするのか、という質問も頂きました。道徳のこの時間を通してどのようなことを考えさせたいのか、どのような力をつけたいのか、もっとビジョンを明確にしていけないと感じました。(文責:鶴田)

